



個人研究費

雲英末雄

58- 4159

大師曰振古能書百家躰別也

夫其心といぬものも万古の堪能と末代乃  
ともとかりとありのなむ唯字形乃かりわ  
りよつて何流といふ事なり

成公綏隸書体曰時變巧易古今各

異篆象既繁草藁近偽適之中庸莫

尚於隸史記秦程邈囚獄中

之難來而改籀文省為隸字上燒是書之始皇喜免其罪云

漸尋思古文而作漢字始皇觀覽之

勅言曰朕不禁獄汝大道世廢是漢字

上

七三

以<sub>レ</sub>来<sub>一</sub>秦<sub>一</sub>字<sub>一</sub> 隸<sub>一</sub>字<sub>一</sub>之<sub>一</sub>各  
故<sub>二</sub>程<sub>一</sub>邈<sub>二</sub>字<sub>一</sub> 隸<sub>一</sub>大<sub>一</sub>臣<sub>一</sub>也

流くると心乃部と何ありあういしてか  
ぬあつこの流とあしとあつこの流と  
うと沙流と何事いあもて未練乃  
事なわ字乃うらかりたててあつこの  
あつこの人い別あつとあつこのあつ  
あつこのあつこの流の是非をかあ  
うと

四声乃文字形相の事

一 四声乃事 去声 上声 入声 平声  
大師道風少平声なわ或は法性寺  
行能徑朝郷乃平声なわ是を平  
本乃最上とと上声乃字と依理郷乃  
平声なわ字のまうとてけい  
なわ去声乃字と一向異様なわ入声  
乃字と弘誓院殿の由なわ平声  
ういしとてしうあつこの三声  
とあつこのあつこの難とあつこのあつ

四声とて、く、ひ、な、る、ゆ、し、上声、去声、  
入声、角、子、肉、を、か、け、な、る、ゆ、し、く、

四声乃圖

上声

去声

入声

平声

点對擡堅の事

一 点對擡堅とて、く、ひ、な、る、ゆ、し、く、の  
点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の  
く、ひ、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の

形をうら、く、ひ、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の  
終、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の  
終、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の

變通異訣曰點不<sub>レ</sub>變謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>布<sub>レ</sub>棊<sub>レ</sub>益不  
變謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>布<sub>レ</sub>筭<sub>レ</sub>方不<sub>レ</sub>變謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>斗<sub>レ</sub>圓不<sub>レ</sub>變  
謂<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>環<sub>レ</sub>是又書之木病也學者切<sub>レ</sub>慎<sub>レ</sub>也

歸天之筆法乃事

一 一、く、ひ、な、る、ゆ、し、の点とあま、く、ひ、な、る、ゆ、し、の

所極りかきししよのりははるかに其  
下よのちい出と文字・筆力よくのちと作  
天地しよるはれしは可物と根本し  
わたり理至誠を息りてはる可  
物とはしよとわ文字と筆をこり  
をこしよとあしし

墨色乃右別付 四何乃筆乃の事

一能筆のかきしはのちすかかむる  
とるしりみく筆乃毛とら通わはる

なごううもして墨色をわらうらりかき墨  
たありと歸天乃筆法のあはく文字乃か  
き終りはらよかか細ありとのすみ付  
あ方乃何おかくとてかきけらりみ  
極あやしと所ありたかきみえ直きみ  
何らみらうらあしあわみうらよそみ  
とすみゆきと在字のこく篇傍あさや  
あはも是を入本乃やとしりあはる在傳付  
すかきよ四何のちらあはるの事しと後

乃らのくらのかたなりて一類のあは  
よのふらあちすしてあはとあはすまの  
かたの字のちとあはくして黒の  
あはののふらあち(中)のあはのあは  
字形といひけるは黒の長のあは  
し(あ)はあはあはのあはのあは  
乃のよのあはとあはすすまの  
あは様よりあはとあはのあはのあは  
やのあは(是)とあはのあはのあは

ふのあはの陰のうらと陽あはのあは  
といふかち千金真傳の秘事なりゆ  
あはのあはの事なり

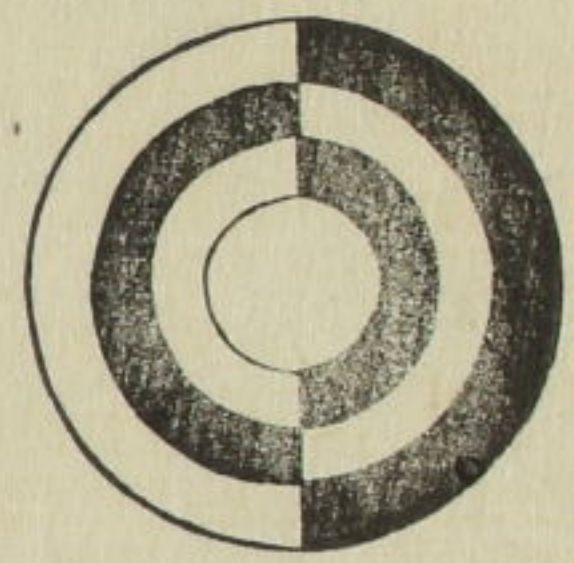
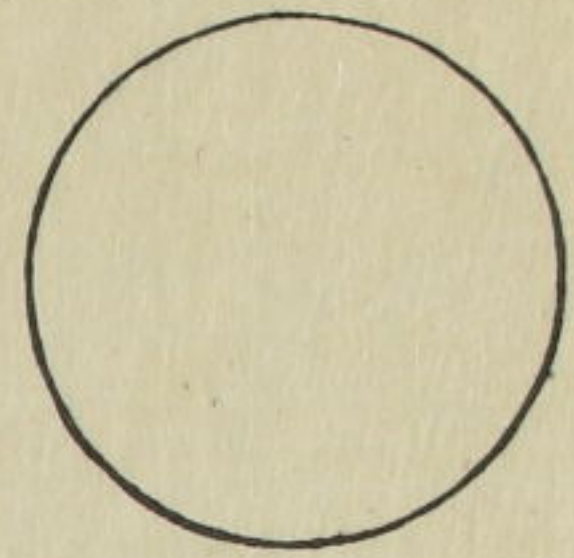
陰陽の筆大極の事

一陰陽の理なりあはのあはのあは  
あはのあはのあはのあはのあは  
あはのあはのあはのあはのあは  
あはのあはのあはのあはのあは  
あはのあはのあはのあはのあは  
あはのあはのあはのあはのあは

一太極之圖

上

七



周子曰無極而大極  
 朱子曰上天之載無  
 聲無臭而實造化之  
 樞紐只一氣之根柢也

凡之と陰と心はてと陽とさかの陰と  
 陽あるれ陽と陰とさかの陰とさかの  
 二氣混合して文字乃精魂とさかの  
 ころ陰陽乃筆はつれと傳あり秘奧乃

事なか

書史會要王羲之曰天台紫真謂余曰  
 書之氣必通乎道同混元之理陽氣明  
 而華壁立陰氣大而風神生是也張懷  
 環用筆十法中第二陰陽相應法曰謂  
 陰爲內陽爲外欵心爲陰展筆爲陽左  
 右亦然

大師曰君臣風化之道含上下畫夫婦  
 義貞之行藏陰陽點容主揖讓第昆友

併三才變化、四序生殺、尊卑愛敬 下畧

おつてうら順逆あり

一筆ありておつて順逆の筆はうらむ文字  
うらむおつた筆はうらむおつたおつて  
とらうらむ順逆の筆はうらむおつたおつて  
おつたおつたおつたおつたおつたおつた  
と心得し



順逆の筆はうらむの事、たつて十文字  
おつたおつたおつたおつたおつたおつた  
おつたおつたおつたおつたおつたおつた  
おつたおつたおつたおつたおつたおつた  
おつたおつたおつたおつたおつたおつた

順のじま 逆のあむ

十 十 才 才

西筆の見えおしきる一度おつた  
筆はうらむおつたおつたおつたおつた



かり是れ筆法とせしむるはなほいふ所あり  
 死字生字の事

一 生字とてたしかまなく死字とてしは  
 ともすかたより少くもあつと筆心のぬ  
 るとぬきぬきの差別がわ引お漏りとお漏  
 てから鳥りともぬかたさぬかたを死  
 字とてし筆の色とりのことらとて  
 起かた孫心りあふと生字りもとりあふ  
 ことなと大秘事りの常と死生くと字

移りとかつてし生死くとうはは事わり  
 し歸天の筆法とていふあふとてし家  
 よ至極乃傳受りや

鳥のともぬかた

鳥のあふと

引捨所たふ

月のあふ

筆を一躍

躰中



時とてあふ

鳥のあふと

上

下

儲精靈をかしこむ所といふも一字一点  
 たり心乃し何れか引けり何れか筆の  
 うりよこも何れか点益乃墨中  
 こも何れか事能く妙なり

會要曰徐浩字季海愚考嶠之子也

官至太子少師

真隸皆草隸尤勝論者謂其力如怒

益工也

猊抉石渴驥奔泉盖徐皓書鋒藏益

心力出字外得意處徃々似王羲之

其妙實有楷法也愚註曰楷亦

書之一

躰也

何能其の如き何れか真行草かあり

心何れか篇はくはくといれ何れか

あや其筆躰字形一と精靈乃こもぬ

何れか堅固か何れか何れか

字形何れか何れか文字皆虚り

何れか心と何れか何れか毛頭と

何れか事なり

古有蚊脚書其字躰纖垂有似蚊脚  
愚考尚書詔板用之俗字  
纖垂各蚊脚盖謂是也

上

此

曲尺の事

一文字のゆやあひおとりのなりと  
真のゆやあひおとりの曲尺のあゆと  
流せよ字形とかけのよととの曲尺の  
字のゆや合同前かのゆやを必真の  
文字よあせじととわねて字の余  
勢とありつんとなくあゆのあやとを  
古人の能事と極めて是をねとつし  
と名ゆきかな大師道風佐理行成

ふとりのよの尊圓親王りのゆやと  
ゆやのゆやとゆやのゆやとゆやと  
なにかの事みあとの心なるよとね  
わのゆよの筆法かなとねと千金莫  
傳の秘事かな

黑白等同の事

一是の字のゆや合曲尺かの黑白の間  
くの等同かな

此字のゆやあひと

上

空

# 龍鳳

こり心真行草字のありあはるるをさし文字の  
拍子として一尺のゆわきをたはしてあすとのて  
思ふとあはるるをたはすの点益かたとして  
とのて三よとあはるるをたはしてあはるる  
よ点益をたはすの事とあはるるをたはすの  
但是を

草字の事なるものくろおと

## ふふふ

ふふふ拍子とあはるるをたはしてあはるる  
てあはるるをたはすの事とあはるるをたはす  
はとあはるるをたはしてあはるるをたはして  
字の形相がたし筆外り味なる

重字合字離字の事

一重字とる筆乃その凡がてすみかをなせ  
 と高なる合字とる篇傍乃字と一字り  
 あらせし高なるとむと墨のかさなるぬ  
 極よかき或と篇はる字と各を射  
 うしてとてその字乃勢力とあらぬき  
 向と離字乃病とりたれと墨と墨と  
 さなると合せし向と字と墨と墨と  
 筆勢乃とあらぬとてとて

筆法十二儀あり事

- 一筆法 順逆乃事或と十二筆法也
- 一風情 点の凡情字の風情也
- 一字義 點盈とる字形とる義とかりとる
- 一去病 七種十病乃病と去事也
- 一骨肉 皮肉とる骨とむとる事也
- 一感法 筆者乃妙所也  
 け六儀口受相傳なりと不可知  
 十二筆法の事
- 一平直均密筆力恒潔補損巧称

止

此

是青蓮院塚の家法第一の事なり

- 一 平と云 字の躰平等と曲尺四方の事なり
- 一 直と云 字乃躰直として異風の事なり
- 一 均と云 四方のくろの事なり
- 一 密と云 字乃くろ透間なる事なり
- 一 峯と云 劔先の事なり
- 一 力と云 骨法と精力の事なり
- 一 恒と云 筆ゆへんからん事なり
- 一 潔と云 字の躰の事なり

- 一 補と云 字乃躰の事なり
  - 一 損と云 字の躰の事なり
  - 一 巧と云 字乃躰の事なり
  - 一 稀と云 字乃躰の事なり
- 右十二筆法と能の事なり
- 一 文字の九品付寶珠平等の事

春 彌  
 一 折  
 捨 折  
 一 捨  
 春 曲 捨  
 一 捨  
 春 回 捨  
 一 捨  
 春 推 捨  
 一 捨  
 春 折 返 捨  
 一 推  
 春 彌 推

遣 捨 春  
 卷 回 春  
 繼 春  
 一

一文字と寶珠の点わけは必ず寶珠と  
 万物を生る天宮なるの筆ゆゑに  
 万物の事  
 一文字と寶珠の点わけは必ず寶珠と  
 万物を生る天宮なるの筆ゆゑに  
 万物の事

寶珠の点二つ合して一文  
 字の事 諸字通用  
 口受と師の問

一文字と天地平なる筆の事  
 打立と筆の事  
 筆先の圓筆  
 一文字と天地平なる筆の事  
 打立と筆の事  
 筆先の圓筆  
 地の形相也と引けり  
 万物生るの理あり

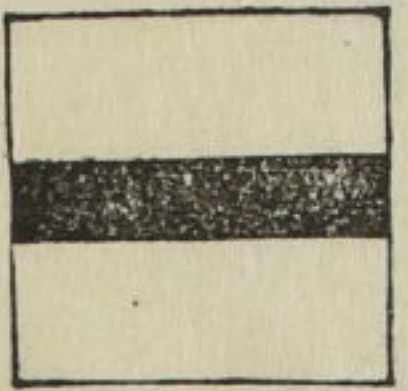


上  
 六

字と都而急登のすくひをさへくじつしき事常  
 借由て一文字と何ありらぬ所も曲尺にわ  
 そりぬ合と一文字を横に引し長短の  
 分敷よもて上下を分けて呼ぶ所は字一  
 字よせうらばりて上下の間よひなく一乃字の  
 ぬ合とて是を死字らうらむ

堅横乃寸ねりし分敷也

真乃のさへて了解也



由て一文字よめ所と一音よむ所と  
 ぬ合とて是にかきやうして自然と  
 一とよむて一とよむるも 傳也  
 何れく何字よむかのちよ一かよと  
 けりらまていかに分けて文字よめ  
 由てぬ合と天候とかきやうのけり  
 可事よむるも 是語よむる事也

文字病跡乃事

一 寒 勢 蕉 細 大 頤 癢 捨 邊



不足 不相應 憔悴

こゝ十病殊々字乃病也わびと人乃さり  
ふ事なりと云ふ記

一木乃折入姿 寸心 くれぬれ かゝりぬ

準 姉一音乃姿 一内 吳振の点益

是七種乃病也

こゝ外に半亦乃病とて文字乃字とて  
ゆめと事也

而之字形さうーたれふと病也

一圓形 半月 三角 方 橫豎

右長左短 左長右短

是一切乃字形也是とてわれふ字乃形  
相とたき事也

大師曰筆論筆經譬如詩家之格律詩  
是有調轂避病之制書亦有除病會理  
道詩人不解聲病誰編詩什書者不明  
病理何預書評也註筆論者筆邑著作  
格者意也律者声也  
書評之評者評論也

上 七

皮肉骨三體乃沙汰の事

一 小野道風 依理 行成 是と三逆とと

三賢をいぬはれとと三賢もえ三得三失  
とと得とと取えぬととたれとと中たれとと  
道風と骨乃一躰ととと皮肉乃二と  
かと行成と肉の一躰ととと皮骨乃二  
ととと依理と皮乃一體ととと骨肉の  
二とととと

所入三とと皮肉骨とと文字乃形相と

わのていふは極とととや答ていふ

乃風とゆくとととととととととと

染ととと

行成とととととととととととと

ととととと

依理とととととととととととと

とととととととととととと

とと三筆ととと乃名筆ととと各一躰と

とととととと三體とととととととと

高野乃大師の沛筆五丁々三体具定し  
後へ師より傳へて筆を志向し墨ぬき  
と三体をなしてわく人ととり代りかかれ  
かたし心めりし

性靈集曰空海儻遇解書先生粗聞  
口決雖然可志道別不曾留心愚註  
者書史會要曰義之有解書之名也  
口決者筆道之口傳也魚然又語也  
所志者三密瑜伽之佛法也蓋論退語也  
大師の三体具定と筆乃聖人かあゆ

しむか

書史會要九鍾繇曰多力豊筋者聖  
也無力無筋者病也

志向せしる三体をいつともなしてわくし  
らむしとてこの筆をいふは人の工業を  
めりし筆体をいふは心むすぶ及ぬ  
しりしとてわくしとて捨侍師とて念  
わくしとてわくしとて

極楽をいふとて福をいふしはわくしとてわくしとて

上

上

張長史曰褚河南論  
書曰用筆如印泥  
沙始不悟後於江岸  
以錐畫字始信長史  
之言字貴藏鋒也

備の三休乃らと一體とてかゝるも  
ふ所かひ侍らんや予若てかく道風乃ら  
骨乃一體とて本と作之し  
行成乃肉依理乃皮とをかきかして  
梁や所さかるともかひいぬも  
骨乃一體とて侍らんや予若てかく道風乃  
徐皓論書曰初學之際宜先筋骨筋  
骨不立肉何所附用筆之勢特須藏  
鋒鋒若不藏字則有病  
患註鋒者筆  
先也骨魚立

筆骨不藏墨中不為堪  
筆道也書者深思其堪

文字乃舒よりみむ事第一乃難  
心得

續書譜曰唐太宗皇帝曰行々如蒙

春蚓字々如縮秋蛇惡無骨也

愚註春蚓秋蛇之  
蒙縮者皆言弱也

大師入本乃らる事

一入本と大師異國青龍寺にわけて真言  
密法乃學問よりその河へ人乃老尼多

止

五

乃僧の飯を居りて鉢中へかけし向を大  
師不思議と思ひてかの老尼よと乃  
術と問ひせ給ぬ老尼答て曰術道ある  
大師乃てくわまよと傳ませよ尼よと云  
手本とてかきて給らんやと云大師やと云  
こゝ給あれと廣と三寸厚と五寸長一尺の  
木を小刀と取合せて木を大師削給て極  
我心自空罪福無主親心無心法不住法  
尼と乃文字十字字と削給二寸五分乃外木

り徹も向事なりと乃何尼と云給く乃手と  
異國と云なりと云大師力なくく病癒備  
或深山よとありて百日乃手習あやと云これ  
も百日乃手なると云事初も給義之曰  
百日なると云事向(ありて)云何と云  
字乃染出来向なりと云事なりと云能字の名  
と云事なりと云 諸大師立かたりてと云事あり  
かかれ沙の術及を病を教よと云事なりと云  
尼やと云事なりと云前自乃と云木と小刀と

止

記廿二

蔡君謨言  
 李廷珪墨能削  
 宋墜溝中經月  
 不壞

あふ大師削高かき倍ふふの度と五寸徹と  
 尺の心とくわしとくはけとせとあり  
 とり敵と鋒中へ授守しとふ是と入を  
 子かやとの筆使と心ゆとと斜斜と形  
 かり則我心乃る字とあり何ぬ  
 愚按右乃大師老尼乃同若麒麟抄  
 しみえり出可けりりかたきと

愚考陳藏叟跋右軍帖曰世傳王逸  
 少義真蹟入木三寸焚之香聞數里

戒心

王羲之百日乃稱古

一日とみ家 二日習 三日 問 四日

了解 五日 うつと 六日 病とみ家 七日

多本とみ家 八日 本根とみ家 九日 形便

外の四体とみ家 十日 神とみ家

かくのまゝくらゐりし 百日終りし家事

こゝろと出那は海いらるるす 明師よとて

予、こゝろ小筆やと世俗の一助とせりて

かやわと海よし

十二点乃事

雀口



雞



魚



鶴翼



蓮肉



竹子



息合



虎



如意



万歳



秋露



余勢



この十二点字形ありて、おのづか傳ありて、  
うけかゝりて

翰林要訣曰、凡四方八面、点、益、皆拱

中心、愚註、四方八面、言筆法之廣博也

上

記十二点

フ ト

ム ヌ

ハ ハ

ノ ノ

ナ ナ

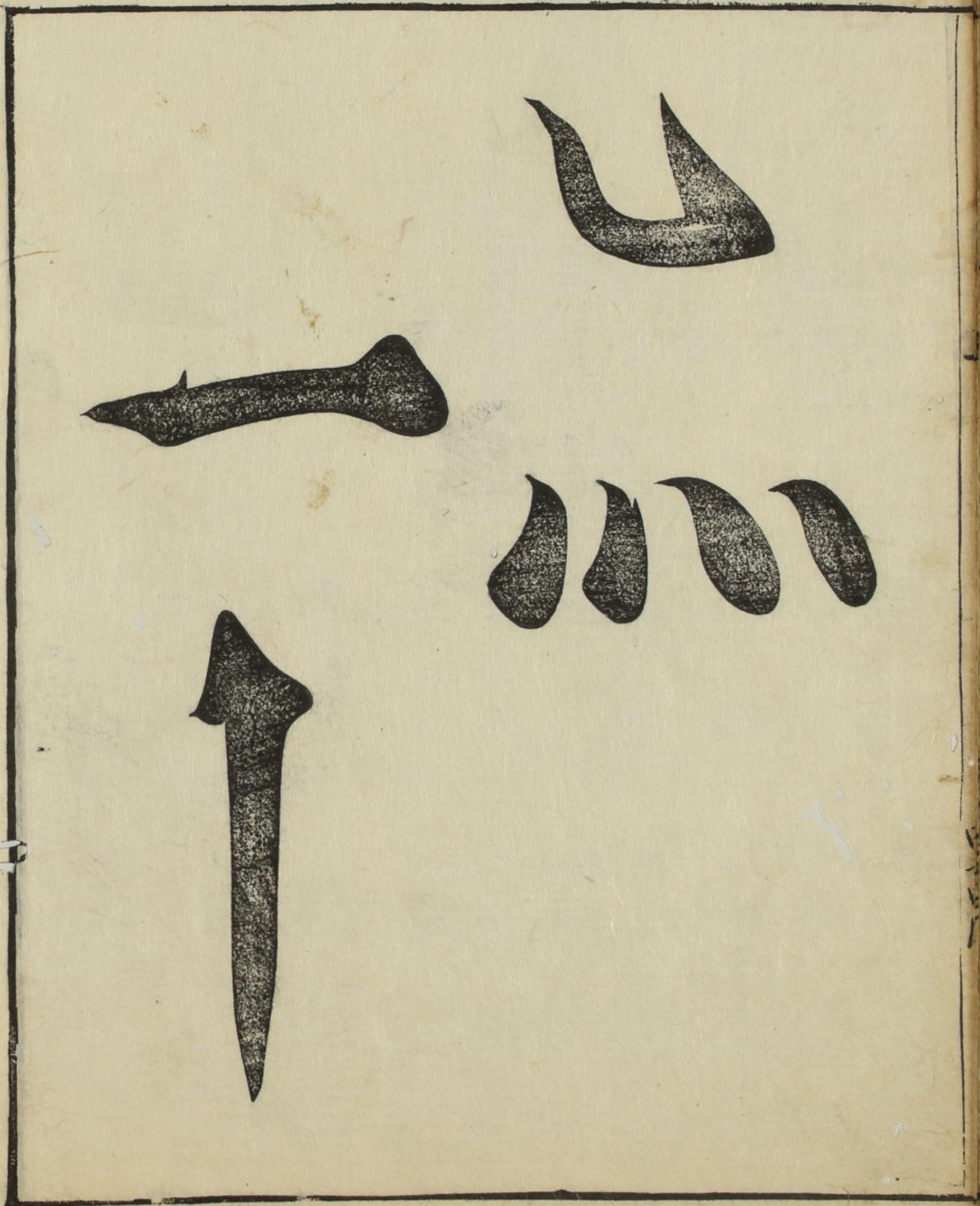
ニ ニ

十三点ノ事

止

二十  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二





十三点乃号

回鸾

鹞鹤

垂露

懸針

魚鱗

遠波

折針

龍爪

虎爪

刀裁

蝌蚪

橫豎

白氏中帖曰驚鸞返鵲并書勢也

文場秀句曰騁回鸞之妙迹盡返鵲

之奇工湛垂露於毫端起懸針於筆

抄動魚鱗於墨沼寫八體之殊蹤散

虎爪於銀鉤窮二王之逸勢二王者

王獻之

是也

此

垂露懸針，篆并東漢曹喜，可作出也。

愚考曹喜有筆論也。

會要第二垂露之點，綴如輕露之垂。

懸針之點，抽其勢，有若針鋒。

篆隸文勢，曰垂露書，如懸針，而勢不

適勁。阿那若濃露，垂故謂垂露。

會要九曰垂露法，口決曰鋒齊，下勢

盡，投筆縮鋒，懸針口決曰鋒須先發。

管逐勢行，趨筆緊收，淡進如錐，畫石

禁經曰如長錐，綴地。

餘池訣曰懸針法，蘭亭年，字盡其勢。

也。愚註蘭亭年者，晉穆帝永和九年也。

古文真寶後集，載永和九年，刻之

本多，來焉多，質本古，永叔曰蘭亭序

世，可轉相傳，本皆不同，蓋唐數家，既臨也。

其喜處，豈其筆法，或傳其一二，想其

真迹，豈如何也哉。世言真本，葬在昭

陵，愚考昭陵者，唐太宗墳墓之

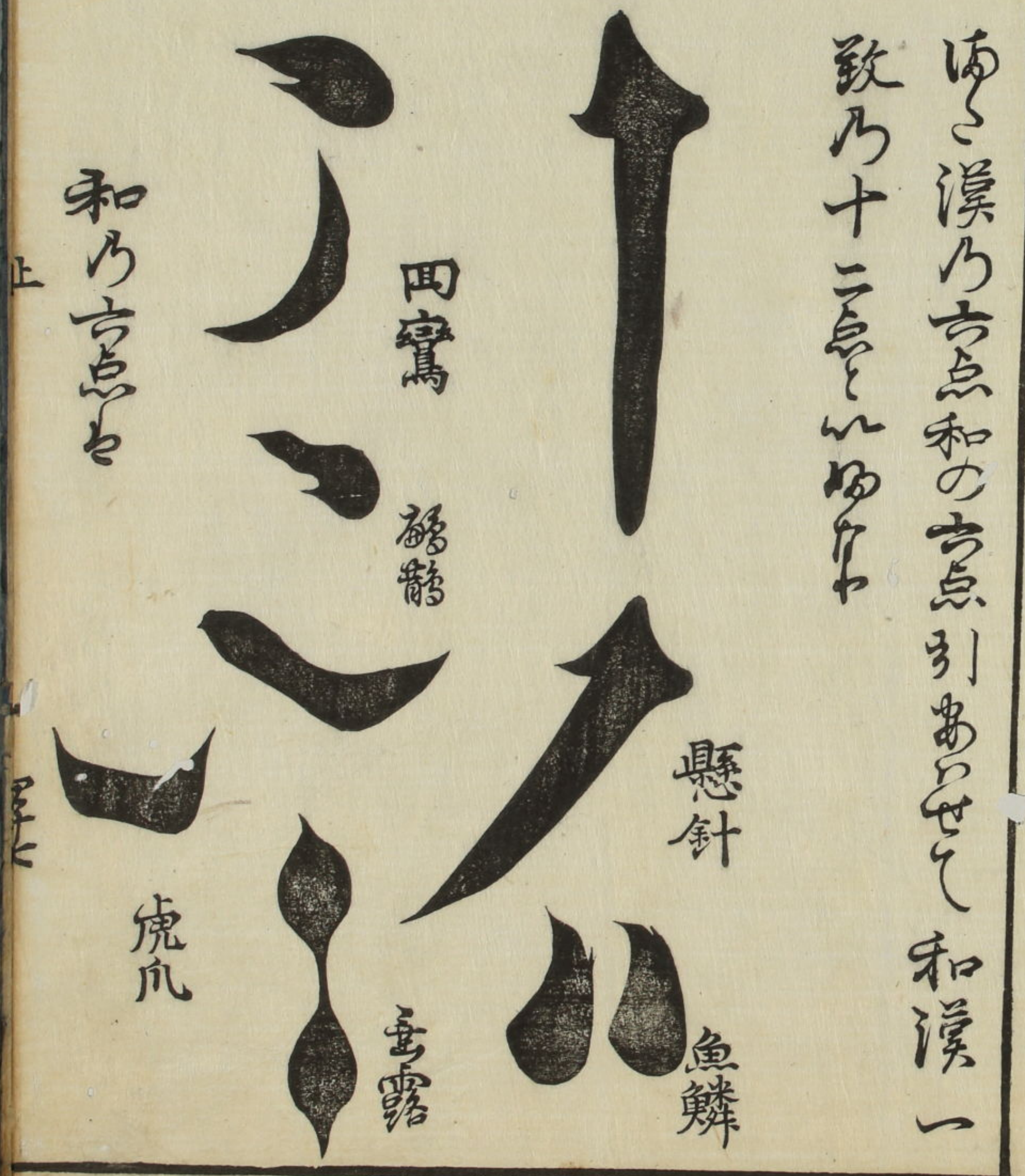
目也。猶故事多端也。今畧焉。

事文類聚，別集何延之蘭亭記曰蘭

亭者王羲之取書之序也。右軍蟬聯

張胃蕭散名賢也好山水尤善草隸  
 永和九年暮春遊山陰脩祓禊之禮揮  
 毫製序具系書用蠶垂紙鼠鬚筆道  
 媚勁健絕代更無凡二十八行三百  
 廿四字字有重者皆別体就中之字  
 最多乃有二十許變轉悉異遂無同  
 者其時適有神助醒後他日更書百  
 千体無如祓禊所書之者右軍自珍  
 愛是書七傳至智永智永即第五子徽之後堂書

漢之漢乃古点和の古点引あらせし和漢一  
 致乃十二点といゆべし



毫波

龍  
鵝  
鵝

虹筋

一  
一  
一  
一

竹針

万歳

文字とみかた点の在出嚴がわと点のうらやう

とけくは侍とくさなわ

映疑曰尚書臺召人用虎爪書告下  
用僵波書皆不可來學也

点昼一の分別の事

一と晋の義之龍爪漢の曹喜の毫波  
懸針の点と堪能の筆けいんをのつ  
不思議のあつた高字のちみ  
人々の益と龍蛇の勢あつと或と龍爪の  
点蛇字のち名付或と返鶴の虫魚鱗の  
点と名けきかな

書史會要或謂義之游天台還會替  
山上洞庭題柱為一飛字有龍爪形

止

八

人遂稱龍爪書

古今篆隸文體曰雲氣書者軒轅之時鄉雲常見其體郁紛爲書記諸也

云々云々益乃名と文字乃のらよ起り云々  
かとの乃理よと不希して点益乃ら云々  
筆つらんと教向とみんよら云々唯余勢  
と味いもたぐ神鬼精力とわけと云々  
乃らと字形乃ら者よと云々乃らとて筆  
つらと字形よと云々乃らとて下手乃ら

とみ向とくよなる乃ら唯とくつらと多  
手積切乃法していかにの点益と筆  
ゆいよとみんよと事なる

性靈集曰書以擬古意爲善不以似  
古迹爲巧

魯直曰隨人作計終後人

人乃かきと向字形乃ら似せぬ筆ゆい  
とみか字の病と云向してと多手ゆい  
す向りよと毎日之案の理と一体よなる

心正筆法論上卷終  
如所云之真の能事と筆の力と

鄱陽姜夔續書譜曰大抵下筆之際  
盡傲<sub>レ</sub>古<sub>レ</sub>人<sub>レ</sub>則少<sub>レ</sub>神氣專<sub>レ</sub>務<sub>レ</sub>適<sub>レ</sub>勁<sub>レ</sub>則俗  
病不除取貴熟習無通心手相應斯  
為妙矣

心正筆法論上卷終

